〈文法 まとめ〉

助詞

格助詞　を に が と より で から の へ や

主　体

副助詞　か も しか だけ でも くらい ほど まで か など

なり さん (すれば) こそ やら まり ばかり なり ずつ

入れない

主語 → 「が」 におまかされる

体言の代用 → 「もの, こと, ところ」 〃

助動詞

どうやら → 助動詞　(「らしい」のとき)

いかにも → 形容詞

前に「 とても」が入れば 形動

例　中村の情報は確かだ

↓

情報は とても確かだ

体言 = 名詞

助動詞「なし」の後に「のに, ので, の」がついたら 助動詞

ない → ぬ　助動詞

〈古典 まとめ〉

枕草子

酉の刻 → 六時 (午後)

いずれもいずれも晴れならずと言うこそなき

係結び

↓

晴れがましい

否定

ぞ, ける → 係結び

鏑 → 遠くに飛ばすための矢

中差 → 戦闘用, 人殺し用

ぞ, たる → 係結び

感に堪えざるにや → 感激を表現せずにはいられないのか

弓を射るときの与一の気持ち

→ もう当てるしかないと覚悟を決めた気持ち

平家物語

軍記物語　全12巻

成立　鎌倉時代

文体　和漢混交体

思想　無常観「変化しないものはなく, すべてはかない」

諸行無常 → 永遠のものはなく, 常に変化する

盛者必衰 → 勢いの盛んな者は必ず衰える

おごれる人 → 権勢を誇っている人 = いばっている人

枕草子

作者　清少納言

成立　平安時代中期 (1001年頃)

こそ - けれ　係結び

係結び

ぞ, なむ, こそ → 強調

や, か → 疑問

徒然草

作者　兼行法師

成立　鎌倉時代末

徒然草 → 最後に教訓

春望

作者　孟浩然

韻　1句目, 2句目, 4句目

夜来 → 昨夜以来

知る多少ぞ → どれほどだろうか

黄鶴楼

作者　李白　詩仙と呼ばれていた

故人 → 孟浩然のこと (古い友人)

広陵 = 揚州